

欠落からの創造

Creation Out of Deficiency

鴻 英良 (演劇批評家)

Hidenaga Otori (Theatre Critic)

何もかもが潰え去り、胸を引き裂かれるような悲しみの中で終わる舞台をコメディアというのならば、バック・トゥ・バック・シアターの『ガネーシャ VS. 第三帝国』は現代のコメディアと言うべきかもしれない。まるで『桜の園』の終局の老下僕フィールズのように、舞台から誰もが消え去った後で、マークは一人取り残されてテーブルの下に横たわったまま舞台は暗転していく。すべての悲しい終りである。にもかかわらず、ここに希望がないわけではないのは、ふたたび彼らはどこかの場所に出現し、これまで演じてきた舞台を再び演じ直すに違いないと思えるからだ。

象の頭をもつインドの神ガネーシャが、ヒトラーの第三帝国へと、奪われた聖なる紋章卍（スワスティカ）を取り戻すために旅をするという叙事的な物語を軸にこの芝居は構成されている。しかし、われわれが見るのはそうした芝居を作ろうとしている劇団の稽古風景のようなものでもあり、またその中から、唐突に、高雅な叙事的な世界が断片的に立ち上がっていくのである。このように、稽古場の現実と物語世界の展開が錯綜する形で交互に現れてくるので、われわれ観客はこの二つの世界に引き裂かれることになるのだが、しかし、稽古場の現実から叙事的な世界への移行、あるいはその逆は、われわれに露わに示されるその仕掛けによって、あるいはその移行の仕掛けが露呈していることによって、思いのほかスムーズに行われ、その往復をわれわれは愉楽とともに堪能することができるのである。

誰がどの役をやるのか、役の選定をめぐる俳優たちの日常的な会話で始まるこの舞台は、ある種、弛緩した感覚によって演じられ始めるが、やがてこの芝居が権力をめぐるものであることが明らかにされ、さらにこの舞台でヒトラーのナチス・ドイツが問題になることが明らかにされるが、この歴史的な問題が同時に神話的な世界と関わりはじめるようとするとき、この劇は巨大な影絵芝居のようなものにもなる。そのとき舞台全体には巨大な透明のプラスチックのカーテンが引かれていて、そこに浮かび上がる舞台全体を覆い尽くすようなガネーシャの母の巨大な影によって物語は日常的な規模から一気に宇宙大の規模の幻想世界に膨れ上がるのである。この視覚の魔術がこれからのこの劇の展開を支えていくのである。その後幾度も引き出されて舞台を覆うことになる何層もの透明なカーテンに描かれた、あるいは投影されたこの影とともに、われわれはこの幻想世界へと誘われることになるであろう。その意味で『ガネーシャ VS. 第三帝国』は視覚的快樂の舞台と言ってもいい。

このように、ともかくもわれわれは、現実から神話へ、あるいは神話から現実へと往還しながら、^{スワス}卍をナチスから取り戻そうとするガネーシャ神の物語とそうした叙事的物語を上演しようとしている劇団の制作、稽古風景との間を往還するのである。

それゆえここにはナチス・ドイツの収容所アウシュヴィッツで生き延びた人間の話も出てくる。だがその導入の仕方はこの劇にあまりにも複雑な問題呼び入れているように私には思える。

一九四三年、場所はポーランド、アウシュヴィッツのシーン。そこにルブリンから貨物列車で移送されてきた人間がいる。彼がまだ生き延びているのは、彼が障害者であることに死の天使と呼ばれたヨーゼフ・メンゲレ博士が興味を持ったからだという。メンゲレは双子の血管を縫い合わせてふたりのあいだで血液を循環させたらどうなるかといった人体実験をしたことで有名な医師である。このメンゲレに寵愛され、さまざまな人体実験の対象とされながら彼は生き延びたのだが、そのことを障害が利点となったというように説明されるのを聞くと、われわれは何を言えればいいというのだろう。障害者だから助かったのだというのだ。そして実際、そのことを演じている役者たちは現実に障害者なのである。彼らの歩き方には不自然なところがあり、またしゃべるのもつねに何かにさえぎられているように思える。観客の私は、動きに常にブレーキを掛けられているような身振りに自分自身が身体の不全を感じているかのように反応する。つまり、自らの反応にブレーキを掛けられているように思いながら私は舞台を見ていたのである。

しかし、古代インドの神々がナチスから卍を取り戻そうというこの物語と身体障害者であるがゆえに生き延びたというエピソードはどのような関係にあるのだろうか。

このことを考えるために、私はバック・トゥ・バック・シアターの二〇〇二年の作品『ソフト (Soft)』を取り上げてみたいと思う。この作品を私はメルボルンの港湾地区の巨大な倉庫の中で見たのだが、その巨大空間に入るとそこには白い布で作られたチューブのような回廊が作られていたのであった。その回廊の中を歩いていくと、その先には大きな空洞のようなものが開けていて、その白い布の中に客席が作られている。そこが劇場なのである。私は、その白い布ゆえにか、白い光に包まれるようにして、前にある舞台上で演じられている『ソフト』という作品を見ていたのである。ソフトというのは頭がちょっとソフトだ、足りない、つまり知的障害があるという意味だそうだ。つまり、この作品は頭の弱い人間、知的障害者に関する舞台であった。ダウン症の患者同士が結婚したとき子供を産んでもいいのかどうか、二組のカップルによって、そうした会話が延々と交わされるのだが、終局、子供を作ることを決意したふたりが舞台後方に向かって歩みはじめるとき、これまでわれわれを包んでいた白い布が一瞬にして舞台向こうへと消え去っていき、それまであった舞台の向こうに広大な無限の空間が開かれるのであった。ふたりはその空間の彼方へと歩いていくのである。そのふたりは樂園を追放されたアダムとイブのようでもあり、人間の始まりが、つまり、あらゆる困難を克服しようとする人間の姿がそこにはあるように私には思われた。こうしたすべてが何かの欠落を抱えたダウン症患者たち本人によって演じられているということによって、この舞台はフィクションを超えて何か新しいものを指示しているのである。

『ガネーシャ VS. 第三帝国』もまた、そのような欠落からの出発という思考とともに展開されているのではないだろうか。だからこそ、アウシュヴィッツで出会った知的障害を持つユダヤ人と象の頭を持つインドの神ガネーシャとがそこから脱出し、やがてナチス・ドイツの崩壊を目にするという物語を展開することになるのではないだろうか。一九四五年五月、ソヴィエト軍がベルリンに侵攻し、そのときヒトラーは地下壕で自殺したということはよく知られた話である。(KGB資料によれば、それが自殺かどうか、黒焦げの死体が本当にヒトラーの死体であったのかどうかは不明である。) だがこの舞台上でベルリン陥落のシーンが演じられた時、カーテンに描かれている絵図はまるで福島第一原発の建屋の爆発後の光景のようにも見え、第三帝国の崩壊が現代の黙示録のように提示されていると見えたのは私だけだったのだろうか。時おり舞台を覆うカーテンには神話的世界の至福な空間の影が立ち現われるにもかかわらず、ここには黙示録的なヴィジョンも出現してくるのだ。このような負のヴィジョンが現れ出すとともに、こうした叙事的物語を紡いでいく劇団の稽古風景もまた徐々に癒しがたい陰悪さを帯びてくるのである。

つまり、劇団員同志、あるいは演出助手や俳優と演出家との関係が陰悪になっていくさまが演じられていくのだ。演出家はこの稽古の過程で徐々に独裁者に変貌していくかのように演じている。それに抵抗する演出助手や俳優たちがいる。そして、演出家を演じている役者はこの芝居に出ている唯一の健常者であり、演出助手や俳優たちは障害を持つ人たちである。現実とフィクションが入り混じる中、健常者と障害を持つ人たちとの間の権力関係がヒトラーの独裁とユダヤ人虐殺とに重ねあわせられ、さらにインドの神ガネーシャがナチスに奪われた卍を取り戻すという物語とも重なって、新たな世界への希求は最高潮に至るのである。

そのことが叙事的物語と並行して演じられていたのである。

しかし、このように書いておきながら私が考えているのは、こうした物語が稽古風景とともに演じられることが可能なのは、やはりこの舞台の登場人物の多くが実際に障害者であるからではないのかと思えるのである。そこには抑圧され、抵抗する身体が現実存在している。『ガネーシャ VS. 第三帝国』について語ろうとするとき、この問題を避けて通るわけにはいかない。なぜなら、卍を取り戻そうとするガネーシャの身振りと新たな生を取り戻そうとする障害者の身振りとは連動しないわけにはいかないからだ。そして、その疎外された身振りによって何かを表現しようとしている障害者の人たちの身振りが、抑圧者の攻撃に対する抵抗の身振りとしてわれわれの前に現れているということをわれわれ観客は不断に感じているのである。このように何かを押しつけようとする意思なくして前に進むことが出来ない身振りによって物語を創り出そうとするような創造的な行為を、われわれの誰かが日常的に取っているだろうか。

すべては夢のような幻影的な世界で起こっている。この非現実性、その夢幻的世界を際立たせるような稽古風景とそれとの交錯、そのことに徹底したこの舞台は、歴史に対する描き方のひとつを見事に指し示しているのではないのか。

ここには抑圧を押しかえすものとしての身振りがある。また権力とは何か問われている。ナチスの時代に何が起こったかも明らかにされている。緊張と弛緩、弛緩と緊張、神話と現実、現実と神話、これらが交錯する舞台のなかでわれわれは権力と人間の問題について改めて思索をめぐらすことになるのである。